

幸駄天記

劇作家

岡部耕大

(32)

車を乗り越して次を待つと、次の列車は2時間はやつて来ない。松浦鉄道は1両のディーゼルカーである。やはり、高倉健さんの北海道を舞台にした映画にも1両のディーゼルカーが活躍していた。

亡くし、高校で野球をしている一人息子がいる。ちょうど、炭鉱の争議の真っ最中である。町にはこんな」とはよくある。ザラである。しかし、健さんと木造の駅舎と1両のディーゼルカーは絵になる。「泣かぬ笑わぬ地区大会の決勝戦で敗れる。主人公は駅から一人去っていく。

高倉健」である。わたしは高倉健さんと映画を一緒にする機会に一度だけ恵まれた。大牟田が舞台の「ひとり旅」である。プロ野球で挫折しがた日である。「次を待とう」。その日までは、それこそ幸駄天のように駆け上がり、閉まりかけのドアを開いてでも飛び乗った。主人公が、大牟田の高校野球のコーチになる。主人公が下宿もつとも、わが松浦駅では列

トしなかつたとかで頓挫し、松浦を去つていった。「精靈流し」は1980(昭和60)年に松浦市志佐町で撮影した東芝日曜劇場(TBS系)のドラマである。あの時代のテレビ局は松浦にまでロケをする余裕があった。名取裕子さんは和子姉さんの実家で休憩を取っていた。薄暗い旧家である。名取裕子さんは、あの家の雰囲気がよく似合っていた。あの猛暑といきれは今もよく覚えている。案内人を務めた友人の吉本務さんは、今でもうひとりと名取裕子さんを語る。あのころ、松浦鉄道を残そうという集会があり、集まる人は自家用車で集まるという滑稽な話を聞いた。

1両編成と健さん

ある日突然に老いが襲う。わざしが老いを実感したのは、列車に飛び乗ることを諦めた日であつた。階段の途中から、ドアが閉まって走り去る列車を見送つた日である。「次を待とう」。

その日までは、それこそ幸駄天のように駆け上がり、閉まりかけのドアを開いてでも飛び乗つたものである。次を待つのが老いである。

わたしは高倉健さんと映画を一緒にする機会に一度だけ恵まれた。大牟田が舞台の「ひとり旅」である。プロ野球で挫折しがた日である。「次を待とう」。その日までは、それこそ幸駄天のように駆け上がり、閉まりかけのドアを開いてでも飛び乗つた。主人公が、大牟田の高校野球のコーチになる。主人公が下宿もつとも、わが松浦駅では列

そんな物語であった。

わたしが書いたテレビドラマ

た。ただこれは、高倉健さんの日米の野球を題材にした映画がヒ名取裕子さんはディーゼルカー

「精靈流し」でも、ヒロインの89年に「重也子」で紀伊國屋演劇賞個性賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

おかげ、こうだい。1979年に「肥前松浦兄弟心中」で岸田戯曲賞を、個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市出身。